

入 試 年度	2026 年度	入試時期	Ⅱ期入学試験	実施日	2026 年 2 月 24 日
課程	博士前期課程	研究科	文学研究科	専攻・ コース	臨床人間学専攻教 育学専修
入 試 方式	一般入学試験		試験科目	専門科目	
「解答」または「解答例」及び「出題の意図」					
【解答】 or 【解答例（採点時の観点）】					
〔1〕					
問題文で示されている学校教育に関わる事象について、図書館や公民館などの社会教育施設は、どのような役割を果たすことができると考えるかを問うている。採点時には、志願する各領域における学術的な知識、視点や論点を踏まえて、適切に論じられているかどうかを見定めている。					
〔2〕					
(1)					
第二次世界大戦後に隆盛を誇った「発達教育学」は、大日本帝国憲法下の国家主義的な教育にたいする反省をふまえつつ、ときにマルクス主義的な解放の志向性を内包するかたちで、表向きには子どもの「発達」可能性や国民の教育権の保障を旗印に展開された。それは 20 世紀後半の日本の教育学シーンをたしかに牽引してきたといえる。発達教育学は民間教育団体の諸運動とも結びつきながら、たとえば堀尾輝久に見られるように「私事の組織化としての公教育」という論理のもと、近代的な「啓蒙」の物語の一環として教育という営為を前提しつづけた。					
しかしこれにたいし、1990 年代以降、世織書房から刊行された『教育学年報』や近代教育思想史研究会（のちの教育思想史学会）をひとつの足場として、さまざまな批判運動が重ねられた。折からのポスト・モダンの流れも受けつつ、さまざまな価値規範が問いに付されるなかで、イリイチ『脱学校化社会』やフーコー『監視と処罰』、アリエス『〈子供〉の誕生』などの日本語訳が相次いで紹介され、近代教育そして近代的「子ども」像の規範が相対化されていった。「発達」概念のオルタナティブとして、とくに西日本を中心に「生成」の教育人間学が提唱され、独語圏の「ミメーシス」（ヴルフ・ゲバウアー）、英語圏の「メタモルフォーゼ」概念（マーティン）とともに、近代教育の限界を批判的に乗り越えようとする新たな人間形成論が展望された。					
けれどもその後 21 世紀に入り、局面はふたたび変わってきている。規範を再創出しえない消極的な構えにたいする批判に加え、ポスト・モダン教育学の政治的脆弱性も問われ、批判運動は一段落を迎えた。近代教育への先祖返りとはまた違った形で、「不可能性の時代」（大澤真幸）における新たな教育思想の可能性が、「探究」や「政治性」、「ケア」					

などをキーワードとしてなお模索され続けている。

※「考えるところを述べなさい」という問い方の出題につき、解答には複数のパターンが考えられます。上記に示したものはあくまで一例です。

(2)

出題の意図を踏まえた回答の記述を求めています。

(3)

①学術コミュニケーションにおける研究成果の公開が重視される状況について理解し、大学図書館の今日的役割を論述できているかどうかを評価した。

②図書館情報学の基本用語をきちんと理解し、説明できているかどうかを評価した。

【出題の意図】

[1]

いずれの領域の志願者にも解答を求めており、教育現象に関わる正確な知識と広い視野、明確な問題意識を問う問題である。

[2]

(1)

いわゆる「戦後教育学（発達教育学）」とそれにたいするその後の批判の構図を知識としてしっかり押さえているか、また過不足なく上記の大枠の構図を整理し論理的に説明できるか、さらにはその後のポスト・ポストモダン状況も含めて、教育と人間形成をめぐる規範に自分なりの意見を示しうるかを問うた。

(2)

博物館学に関して、博士前期課程で求められる学術的な知識と論述力を問う問題です。ICOM の博物館定義を単に知識として把握するのではなく、多様性・包摂性、持続可能性といったキーワードを手がかりに、その背後にある現代社会の要請や価値観の変化を読み解く力を備えているかを問うものです。さらに、具体例の提示を通して理論的理解を現実の博物館活動に結びつけ、論理性と一貫性を備えた文章で表現できることを求めています。

(3)

大学院において研究を遂行するにあたり、最低限必要となる図書館情報学に関する知識と論述力を確認している。

合否判定の方法及び基準

入学試験は文学研究科のアドミッションポリシーに基づき、これを満たす学生を募集することを目的に実施しています。

合否判定については、本研究科のアドミッションポリシーを満たすことを、総合的な視点により合否を判断しております。